
ウォーシップガンナー2 蒼海の少女達

榎陸戦隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウォーシップガンナー2 蒼海の少女達

【Nコード】

N7929K

【作者名】

榎陸戦隊

【あらすじ】

ウィルキア帝国の大戦から三十年、米ソ熾烈な地下資源の確保の争奪戦繰り広げられていた。

そこに南太平洋に浮かぶ島があった。

そこには、東ルイズ西ルイズに東西別れた王国があり、レアメタル、化石燃料豊かな国があった。

大戦期は、帝国傘下だったが天城大佐、筑波大尉らの働きがけで帝国に離反して南太平洋の解放戦を展開した。

終戦後は、帝国から提供されてい戦闘艦艇と日本とウィルキア立憲

王国の民間警備会社と連携しヨーロッパからの支配からの独立を目指すアジア諸国の、アジア植民地独立戦争を支援し太平洋のウィルキア、日本と並ぶ海軍国家に成長した。
大戦から三十年、人類は、また過ちを繰り返そうとしていた。

00 話落ちる影

(兄上お考え直してください)

宮殿の一室で五十後半の

二人の男が口論をしていた。

(アル、．．．あれは、こ

の世界に在っては、ならん物だ)

サイドは、机を叩いてい

った。

(三十年前ウィルキアの過ちを、繰り返すつもりか、お前

は)

アルは、振り返り際に言った(兄上、この東ルリーズと

西ルリーズが大国に潰されないためには、力が必要なんですよ)ア

ルは、そう言い残して部屋を出ていった。

(アル、お前は、筑

波大尉から言われたこと忘れてしまてのか)サイドは、椅子に座りながら何かを悟った。それから半年後の東ルリーズと西ルリーズの両陸海軍の合同大演習で悲劇が繰り返されたのであった。

01話着任(改)

東ルイーズと西ルイーズの合同大演習開始三時間前・・・

僕、伊吹タケルは、日本海軍から、NGO組織、OPKF海上警備会社に転属になった。

会社では、海軍時代に起きた事故のせいで艦をたらい回しにされ人手不足の女性のクルーだけで編成されたクシナ級警備艦一番艦クシナに航海兼CIC補佐士官として配属された。

この艦に配属されたのは、たらい回しにされたこともあるが、この艦の艦長は、自分の血の繋がらない姉さんだからだ。

伊吹は、着任の挨拶のために艦長室行つた。

艦長室のドアを叩く。

「どうぞ」と返事が帰ってきた。

「失礼します」伊吹は艦長室に入る。

そこには、艦長の鈴鹿と日本海軍の制服を着た少女がいた。

日本海軍のずいぶん若い客将だなど、伊吹は、思った。

伊吹は、敬礼し、

「本日、イージス護衛艦アスカより転属になりました伊吹タケル一尉です」

鈴鹿が敬礼し、

「クシナ艦長の赤城鈴鹿一佐です」

「艦内を案内します」

通路を歩く二人、伊吹は、申し訳なさそうにいう。

「スズ姉・・・じゃない、赤城艦長、失礼しました客人がおられときに・・・」

鈴鹿は、クスツと微笑んでいった。

「タケル君にも見えてるんだ」

伊吹は、不思議そうな顔した。

「あの艦長」

「二人のときは、スズ姉でいいよ」

「タケル君がああ艦魂が見えているてことは、いい艦乗りてことだよ」

「タケル君は、前に乗ってた艦の見てたの？」

伊吹は、目を背けたて言った。

「前．．．ですか」

伊吹は、海軍時代にも一度艦魂をみていた。

2年前、日本海軍、新型イージス巡洋艦の試験航海での漁船との衝突事故のとき、伊吹は、CIICレーダー手として乗り込んでいた。そこで不思議な少女に出会う少女は、伊吹に言った。「レーダーに不調だから、見張り員を出してほしいと艦長に進言を」と伊吹は、若い士官だなと、思った。

伊吹は、その少女に言われたように艦長に報告した。

艦長は、最新鋭艦になのだから、不調などありえないと言われ見張り員増員も却下した。

一時間後、漁船と衝突事故が起きた。

原因は、電気系統のトラブルでレーダー出力が低下し小型船舶のECIが受信しにくくなり見張り員が気付いたときには、遅く衝突、責任を恐れた艦長は、当直だった伊吹のヒューマンエラーとして報告した。

そして今にいたる。

艦内放送が流れるた。

(演習開始三十分前、総員戦闘配置)

鈴鹿は、キリツとし

「それでは、CIICをよろく」

伊吹は、「はっ」と敬礼する。

伊吹は、CIICに向うとちゅうに水兵とすれ違う、伊吹は、何処かしてみた顔だとおもった。

思い出した東ルイズの第一皇女だと

なぜ皇女殿下がこの艦に水兵服で乗っているのかを、合同大演習で

知ることになる。

02話少女達の開戦（改）

合同大演習開始された。

東ルイーズのサイド国王の座乗する戦艦ブルネイを旗艦とする東ルイーズ国防軍並びに親衛隊

迎えるは、サイド国王の実弟の西ルイーズの国王のアル率いる西ルイーズ国防軍。

それを、艦閲する、ウिल्キア立憲王国海軍、日本海軍、そして我々OPKF海上警備会社、南太平洋方面隊第一教導連隊。

演習開始直後、東ルイーズ海軍旗艦ブルネイに実弾の対艦ミサイルが直撃大破、その後西ルイーズ海軍の駆逐艦が突如、艦閲艦を追い払う用に無誘導のミサイル、魚雷を打ち込んでくる。

ウिल्キア立憲王国海軍と第一教導連隊はほとんど艦隊陣形を乱す事無く互いをカバーし艦に直撃するターゲットのみ撃墜する。対する日本海軍は、バラバラに回避運動で衝突が相次ぎ対空砲かで同士討ちを起こす始末だ。

伊吹は、日本海軍の操艦技術が低下していることにため息がでた。そこに日本艦隊司令から傍受されやすい回線で「民間警備艦隊我々の撤退を支援せよ」と通信が入った。

そこに、秘匿通信ホログラムがバイザー越しに写る。

「赤城艦長、どおする、あの無能司令、自分達だけ逃げ出そうとしているわ」

そこには、幼さが残る黒いショートヘアにヘアバンド、の少女が写っていた。

彼女は、パルヴァティー級航空警備艦一番艦の艦長の高雄梓一佐、中学校を飛び級し日本海軍士官学校に入学し鈴鹿とは、五歳年下の同期である。もう一人通信ホログラムが写る。

「ウिल्キア海軍は、攻撃を受けている東ルイーズ親衛隊の援護、救助をしています」

「我々もこれを援護、を進言します」と言ったのは、妙高摩耶二佐、サクヤ級高速イージス警備艦一番艦の艦長、梓一佐同様鈴鹿と同期である。

鈴鹿は、「我々は、東ルイーズ海軍旗艦ブルネイの国王並びに乗員の救助に向う」

「サクヤの部隊は、我々の艦隊の援護を、パルヴァティーの部隊は、日本艦隊を援護をするフリをしながらウィルキア軍と親衛隊の退路の確保をお願い」鈴鹿がそう言うと

「了解」x2

二人が敬礼する。

各艦最大戦速で演習海域に突入する。反乱艦艇から、ミサイルが飛来する、鈴鹿が司令を出す「対空戦闘、CICの指示の目標、撃ち方始め」

砲雷長のターニヤ・ライハルト三佐が攻撃方法の指示を出す。

「対空VLS、一番から六番発射」

対空ミサイルがVLS発射機から発射される。

対空ミサイルは、迫ってくる対艦ミサイルを撃ち落としていく。

伊吹は、「まだ一発残っています」と言う。

「C I W S 攻撃始め」

C I W S がミサイルを自動追尾、毎分三千発射速度で三十七ミリ弾を撃ち出す。

ミサイルは、二百メートル手前で撃破した。

クシナから発艦した艦載ヘリが超低空で接近、ブルネイの後部ヘリポートでホバーリングする。

ヘリからランペリングする衛生兵、曳航要員たち、ブルネイは、艦橋の根元に対艦ミサイルが直撃し艦長以下CIC要員が戦死、舵が物理できに不能になり自足不能になっていた。

護衛艦に曳航され警備艦隊の防御陣形の中にはいる。

鈴鹿は、ウィルキア軍艦艇と生き残った東ルイーズ艦艇に発行信号を送った。

(第一教導連隊は、寮艦が確保した航路を突破、当海域から離脱する)

(我に続け)

艦隊は、全速で海域から離脱する。

反乱艦艇は、追尾してこない。

クーデターから六時間、教導連隊所属海上ドック艦アカシに入渠するブルネイ

大破したブルネイから運びだされたサイド国王、しかし傷が深く軍医は、もう手の施しようがない今のうちに会うよう皇女のマルタに告げる。

医務室でマルタと鈴鹿がサイドの遺言を聞いていた。

「赤城艦長なぜ、私を助けにきた、ブルネイが沈んだら娘たちを連れて逃げるよ．．．」

鈴鹿は、言う。

「ブルネイは、沈まず大破漂流でしたので逃げるわけには、行きませんよ」

サイドは、皮肉に笑う。

「そうゆう所は、親父さんにそっくりだな」

「ありがとう、おかげで多くの乗員が助かった．．．」

サイドは、マルタに言う。

「マルタ、アルを恨まないでやってくれ．．．あいつは、東ルイズと西ルイズを守ために残っていたんだ」

マルタは、サイドの手を握る。

「お父さまどうして．．．伯父さまは、何を残していたのですか？」サイドは、薄れる意識中で事の成り行きを話す。

「三十年前．．．ウイルキア帝国との大戦．．．当時帝国の傘下だった我が王国に密かに超兵器の供与が行われた．．．私達兄弟は、帝国に離反し超兵器を封印した」

「そし帝国の最後の超兵器が北極海で撃沈され全ての超兵器が活動を停止したかに思えた」

「だが．．．全ての超兵器が停止したのは、王国に提供された超兵器を活動を停止させた後だったのだ．．．」

「そして．．．今、米ソの地下資源の利権獲得争奪戦、米国は、東ルイーズの近海での米駆逐艦が沈んだのを．．．王国の仕業とみなしそれを口実に侵攻しようとしていた」

「アルは、封印した超兵器の再起動させ、その力で米国に対抗するべきだといった」

「私は、反対した超兵器を再起動させれば米ソの超兵器も起動し戦争どころか人類が滅ぶ、民をそのような争いにまきこみたくない」と頼む．．．マルタ、赤城艦長、弟を．．．いや．．．人類が再びウイルクアの過ち繰り返さないよう超兵器を今度こそ．．．全て葬ってくれて．．．くれ．．．」

握っていた手が、マルタの手から滑り落ちる。

「お、お父様ー！」

「はっ、国王達と父の誓いを必ず果たします」鈴鹿は、敬礼する。しばらくして、アラームが艦内に響く。

鈴鹿は、近くのインターホンに駆け寄る。

「何があつたの？」モニターごしに副長のナガラ三佐報告する。

「艦長、米海軍の太平洋第七艦隊が我々の航路上、26海里先に展開、国王御家族の即引き渡しを要求をってきています」

「な、何ですって!」

鈴鹿達の戦いが始まる。

続く

03 話見えない敵

アラームが鳴り響く艦内、鈴鹿は、CICに駆け込む

「状況は、」

情報火器管制システム統括長のシナノ一尉が報告する。

「第七艦隊（米海軍）は、我々の航路を封鎖するため、本艦から26海里先の地点に展開中、我々を包囲する模様です」・・・
「か、艦長、第七艦隊司令長官アーノルド・ウイガー少将より入電です」

鈴鹿バイザーを掛ける。

「回して」

そこには、典型的なアメリカ軍人の様な、出立ちの男が映る。

「アメリカ海軍第七艦隊司令のアーノルド・ウイガー少将だ」

「我々は、環太平洋条約に基づき反乱軍から国王御家族の保護のため出動した」

「貴艦隊の指揮官と話したい」鈴鹿は、返答する。

「こちらは、OPKF海上警備会社、南太平洋方面隊、第一教導連隊、指揮官兼艦長の赤城鈴鹿一佐です」

アーノルド少将は、鈴鹿達を見下すように言う

「ずいぶん若い指揮官だな、我々は、東ルイズでのクーデターの報を受け国王御家族の保護と反乱軍鎮圧のために出動した」

「さあ、即刻、国王御家族を本艦隊、移乗させたまえ、海軍ごっこをしている貴官らには、手に負えない事態なのだよ」

鈴鹿は、拳を強く握り締める。

「失礼ながら、本艦隊は、国王陛下より御家族を日本の横須賀に護衛移送の要請受けてますので、その申し入れ受けられません」

アーノルド少将は、さらに見下すように言う

「貴艦隊が反乱軍に加担し国王御家族を誘拐した可能性もあるのだ、そうなれば我々は、貴艦隊を撃破しなければならない」

「身の潔白を証明したくば、国王御家族を我々に任せたまえ、五分考える時間を与えよう」

完全に獲物を寄越さないと沈めるとゆう、脅しだ。

「赤城艦長、私達を米海軍に引き渡してください」マルタが艦内通信で鈴鹿に言う。

「それは、出来ません。」

鈴鹿は、即答する。

「どうしてです」...

「私達のためにもう、血が流れるのを...見たくありません」

マルタは、涙を浮かべて言った。

「マルタ、親友として言うわ」

「貴女がここで諦めれば、国王陛下の死が無駄になります」

「それに、このクーデターは、アル国王陛下が起こしたもので、ないと思われれます」

鈴鹿は、言う。

「それは、どうゆうことですか？」

マルタは、尋ねる。

「この手際が良すぎる米軍の介入、クーデターそのものが米国の策略なのだと思われれます」

鈴鹿は、マルタに言う。

「そんな」...

同時刻・米海軍第七艦隊旗艦、戦艦モンタナ...

「全艦に通告、荷物（国王家族）受け取ったら、反乱軍（第一教導連隊のこと）の殲滅戦に移る、捕虜は、無用（皆殺しの意味）」

アーノルド少将は、通信士に命令する。

「司令、そのような事をしてしては、！」

ミサイル巡洋艦インディアナポリスの第七艦隊副司令クレア・スプリングフィールド准将が言う。

「准将、CIAのシナリオに無いことだが、我が軍を担う将兵たちのいい経験になる」

「今まで、ゲリラの魚雷艇擬き（漁船に魚雷発射官を敷設した船）ばかり相手をしてきた若い貴官も海軍に入ったかいるというものだろ、今後は、もう戦艦を沈める機会は、来ないだらからな」（この人は、相手を訓練の標的艦か何かとしか見ていないのか一つの艦に五百人からの乗員がいるのに）

（いつから、我が軍は、マリンシップを忘れ、他国の軍を見下し、国を守るためにいるの者が国の利益追求のためだけに動く軍に成り下がってしまったのか・・・）

海軍ごっこは、我々の方だ、目の前の彼女たちの方が本当に平和を守るために戦っている・・・

私も彼女等と同じ志で軍人になったのに・・・

「各艦、標的データ入力かいしせよ」

アーノルド少将は、クレア准将の想いを裏切るように命令を続ける。

「司令、対艦ミサイル接近迎撃間に合いま・・・」

オペレーターが言い切る前にミサイルがモンタナに命中する。

「何だ！小娘共が撃ってきたのか!？」

アーノルド少将がオペレーターに聞く。

「違います」

「ミサイルは、本艦の九時方向から飛来しました」・・・

「レーダーには、航空機、艦艇の反応は、ありません」

アーノルド少将は、鳩が豆鉄砲で撃たれた様な顔する。

「どうゆうことだ?」

「見張り員より報告、多数のミサイル艇接近、距離五百・・・」
通信が途絶える。

所属不明のミサイル艇は、第七艦隊に、肉薄する。

数隻が艦隊陣に突入、12.7センチAGSらしき砲が戦艦の重甲な装甲をブリキカンの様に撃ち抜く。

「何をしている、早く反撃しろ!」

「ダメです」

「射撃レーダーに反応しません」

「これでは、攻撃出来ません」

レーダー射撃に頼る米軍艦艇は、反撃できずに海の藻屑になる。

一方、第一教導連隊は・・・

「米軍艦艇の火災を視認、第七艦隊が攻撃を受けている模様」
ブリッジから報告が入る。

「どうゆうこと?」

鈴鹿は、確認する。

「艦長、第七艦隊副司令のクレア准将より緊急入電です」

クレア准将は、あの乱戦中でも冷静だった。

「赤城艦長、我々は、今、所属不明のミサイル艇群の攻撃を受けている、支援を願いたい」

「敵は、十メートルの距離でもレーダー波のエコーがない程のステルス艦艇」

敵の武装を言う。

「武装は、大型対艦ミサイル、主砲は、見た目は、AGSだが戦艦の装甲を貫き防水区画を抜けて艦内に達する貫通力、発砲炎が見えない」

「貴艦隊の被害は?」 鈴鹿が尋ねる。

「旗艦モンタナ並びに戦艦ラングレーが大破機関停止漂流中、空母リンカーンが中破、傾斜が大きいため、艦載機離着艦不能、他、旗艦隊護衛の駆逐艦6隻が轟沈」 鈴鹿は、クレア准将に尋ねる。

「貴艦隊で戦闘行動が可能な艦は?」 鈴鹿が尋ねる。

クレア准将は、答える

「私のミサイル巡洋艦を含む6隻だけだ」

「今は、手動管制の速射砲攻撃で自艦を守るのがやっと」

「クレア准将、敵のミサイル艇を損傷艦艇から引き離せますか?」

「出来るが、何か策が?」

クレア准将が尋ねる。

「はい、先程送ったポイントに敵を誘い込んでください」

「我々の戦い形を御らんにいれましょう」

鈴鹿が言う。

第七艦隊の残存艦艇は、鈴鹿の指示どおりに、敵を誘い込む。

「あの、快速艦艇に戦艦でどう挑んだ、我が軍最大の戦艦モンタナ級を一分で大破させた奴らだ」

「それに、今は、巨砲に代わり超射程の誘導ミサイルの時代なのだ」
もう艦隊形成の射撃の練度が物を言う時代は、終わっていると、クレア准将は、思っていた。

クシナを先頭に戦艦四隻が単縦陣をとる。

「艦長、攻撃方法はどくなさいます？」

ターニヤが言う。

「各艦に発光信号、（主砲発射準備、弾種、対空焼夷散弾、旗艦の主砲発射を合図に一斉掃射）」

鈴鹿が司令を出す。

「ヤー（了解）、主砲発射準備、弾種、対空焼夷散弾、目標、敵ミサイル艇群」

ターニヤが復唱する。

クシナが、取り舵を取る。

後続艦が、息がぴったりと続いていく、各艦の主砲全機が敵を捕らえる。

「主砲、撃形始めー！」

鈴鹿が言う。

それと同時に全艦が主砲を撃った。

主砲弾が、ミサイル艇群の頭上八百メートルで炸裂、ゴムに包まれた鉄球の弾子が三千度のスコールを降らす。

「脱帽ね、ステルス艦艇に時代遅れの巨砲の対空弾をあんな使い方をするとわ」

クレア准将は、脱帽する。

「アーノルド司令は？」クレアは、通信士に聞く。

「はっ、駆逐艦ギアリングに救助された模様です」

「しかし、アーノルド司令は、重度の錯乱状態で指揮継続不能なた

め、艦隊指揮を副司令に移頂されます」

通信士が言う。

クレアは、帽子を被り直す。

「本艦隊は、攻撃断続不能なため、漂流中の戦艦を曳航し転戦する」

.....

「通信士長、警備艦クシナに発光信号、（貴女らの、武運を祈る）と」

第七艦隊は、撤退していく。

一方、炎のスクロールを浴びたミサイル艇群は、高熱の弾子で船体とアレイマストを損傷、行動を停止する。

その中でまだ行動する他のミサイル艇と異なる艦型をしている艦がいた。

船体は、ステルス設計の八十メートル程のトリマラン（三胴）式、何かの送信機らしき大型のアレイマスト、損傷でステルス機能を失っているとはいえ足は、健在で逃亡しようとする。

「逃がさないで、拿補して」

鈴鹿は、言う。

「任せて、」梓が言う。

後方の航空警備艦のパルヴァティーから発艦した、凡庸多目的VTOL戦闘機アルフが航空魚雷を投下する。

魚雷は、八十ノットでミサイル艇を追尾、無信管の魚雷は、敵の推進機を破壊し停戦させた。

「各艦陸戦隊、臨検準備」鈴鹿が号令をかける。

「伊吹一尉、貴官にも行ってもらいますか」鈴鹿が言う。

.....「え？」

「何で自分が？」武器庫でぼやく伊吹

「ちょうど男手が欲しいと申請してたと頃なんだよね」

そう言うのは、陸戦科の大田ミノリ三佐。

「心配するな、ドンパチは、専門家（陸戦一課）に任せて、あんたら（陸戦二課）は、拿捕した艦を回航すればいいから」そう言うて

6.5ミリ短機関銃と6.5ミリ拳銃を渡される。

「不安だ！」

伊吹の訴えも虚しく高速内火艇に引きずり込まれる。

敵ミサイル艇からの抵抗は、なく陸戦隊員がミサイル艇に乗り込んでいく。

「ブリッジ、CIC、機関室をを制圧しろ」

ミノリが突入の合図で艦内に突入する。

しかし、艦内は、乗員の姿は、居ない幽霊船のごとく。

伊吹は、CICのシステム制御ルームに入る。

「何だ、見たことのない制御ユニットだ」

すると携帯無線に強烈なノイズがはしる。

「ぐっあ」インカムを外す。

すると、背後に気配がした。

伊吹は、振り向く。

「男の子？」

目の前にプラグの付いた特殊スーツを着た十五才位の子供がいた。

「うご...」

伊吹が言うつとする。

すると、少年は、伊吹が思考する前に持っている銃を電光石火の如く蹴とばす。

続けざまに体にストレートをきめられる。

「ぐうっ！」

防弾ベストを着ていてもこんなに痛いものなのか？

伊吹は、壁にもたれかかる。

少年は、伊吹の持っていた銃を拾った。

少年は、銃を伊吹に向けた。

「動いちゃダメ、すぐすむから」

殺される、伊吹は、そう思った。

「ウツ！」

少年は、倒れこむ。

「伊吹一尉、大丈夫か？」

ミノリが言う。

少年は、ミノリが放った、電気ショックガンで気絶していた。

「はい、おかげで助かりました」

「この子は？」

ミノリが尋ねる。

「わかりません、突然襲われたので」

伊吹が言う。

ミサイル艇は、曳航され、少年は、拘束されクシナの医務室で薬を投与され眠っている。

「伊吹一尉」ミノリが呼ぶ

「体は、大丈夫か？」

ミノリが尋ねる。

「はい、大丈夫です？」

伊吹が答える。

ミノリは、伊吹の着ていた防弾ベストを見せた。

「中にはいていた防弾プレートは、ガタガタ、胸のマガジンポーチに入っているマガジンもが割れていたわ」

「あの搭乗員、すごいバカ力ね」

「それと、他のミサイル艇は、無人だったそうよ」

「ということは、あの少年が一人で第七艦隊を！？」

「伊吹一尉、あの子、女の子よ」ミノリが言う。

「え！？」

この第七艦隊を一人で壊滅させた少女は、何者？

これは、ほんの始まりでしかなかった。

続く

04 話横須賀の影(改)

東西ルイーズのクーデター所属不明のミサイル艇群襲撃から四日、南太平洋方面旅団本隊と合流し横須賀に寄港した我々を待っていたのは、第一教導連隊所属の全艦艇乗員の上陸禁止、連隊長の鈴鹿、連隊所属の大隊長の梓と摩耶の三名が、環太平洋衛軍の議会への出頭命令、施設に軟禁される皇女達、日本政府の態度は、冷たいものだった。

「OPKF海上警備会社、南太平洋方面隊所属第一教導連隊、貴官等は、東西ルイーズ王国クーデター時、何故国王家族が貴艦に座乗していたかを問う」
薄暗い裁判室で三人に質問する幕僚将校たち。

「貴官等が、国王家族を拉致しクーデターに加担した疑いが出ている」
米軍と同じ事を言う、たぶん環太平洋衛軍上層部もグルだ。
「はっ、そのことに付いては、我々第一教導連隊に国王から特命を受け合同演習の前日に極秘に本艦に乗艦していただきました」
鈴鹿が説明する。

「異議あり、その証言に信憑性がありません、最近の民間海上警備会社は、やたらと軍事介入が目立ちますからな」
異議を言う細茅星朗中将、クーデター事に真つ先に現場から逃げた日本海軍の艦隊司令我々に助けを求めてきておいてなんていう言い草だ。

(最近の日本海軍(正規軍)が頼りないから、私たちNGO海軍が出張ってるんじゃない)
梓が心でいう。(しようがないでしょ、官僚主義で今は、腐敗の塊なんだから)摩耶が目で言う。彼女等がOPKF海上警備会社に入ったのは、それが理由だ。

彼女等が正規軍が嫌いの様に彼ら(正規軍)もまた偽海軍のNGO

系の民間海軍が嫌いなのだ。

正規軍上層部は、潰しにかかる。

「彼女等は、クーデター事にそうとうの弾薬を使用している記録が残っています」

「これは、明らかな攻撃行動です」細茅星朗中將が幕寮將校たち訴える。

「それに関しても我々は、正当な理由があります」

鈴鹿が言う。

「それは、クーデター発生時、細茅星朗中將自身が我々に支援を求め、それによつての支援射撃でした、通信記録が残っています」

鈴鹿は、言う。

「そ、それは、捏造された物だ」

細茅中將が言う。

「なお、証拠の通信は、オープンチャンネルでしたので、我々の他に東ルイーズ親衛海軍並びにウィルキア海軍の艦艇にも記録されているので証拠の信憑性が十分あります」

鈴鹿は、中將を冷やかな目で言う。

「ウツ！・・・」細茅中將は、言い返せなかった。

（あ、墓穴彫った）

梓が心でいう。

（相変わらず間抜けね）

摩耶が心でいう。

（そのまま墓穴に入ってくないかなー）

梓が心でいう。

（二人とも言いすぎよ）

鈴鹿は、目で言う。

「国王からの特命に付いては、皇女、マルタ殿下が証人にです」

「この場で証言して頂きたい」

鈴鹿が言う。

幕寮將校が言う。

「本日の議会は、ここまでとする」

「明日続きを行う、貴官らは、それぞれの艦にて待機せよ」

三名は、その後三時間かけて始末書類を書かされ艦に向う内火艇に乗った。

「どうする？上層部は、完全に怪しいわ」

梓が言う。

「細茅中将は、馬鹿だから上層部からは、知らされていないかったと思いわ」摩耶が言う。

「そんな事より、マルタが心配よ」

「たぶん、議会は、口封じをするわ、議会に向う途中の事故とゆうことにして・・・」

鈴鹿が言う。

「陸戦隊は、艦内待機、へりも発艦禁止になってるし・・・」

「それなら、いい案があるわ」

梓が言う。

・・・翌日、三名は、議会に向うために陸に上がる。

そこに、細茅中将がいた。

「第七艦隊襲撃の容疑者をこちらに引き渡してもらおう」

細茅中将は、そう言って襲撃犯の少女をクシナから連行する。

一行は、議会に向うために車で向う。

「何で、細茅中将（日本海軍）が連れていくのかな」

「もしかして、例のミサイル艇は、日本海軍の新兵器あの娘は、テスト搭乗員だったてことかな」

梓が言う。

「いえ、いつものように自分の手柄のようしたいからでしょ」

摩耶が言う。

「ああ、なるほど」

梓が納得する。

（納得しないでよ）

鈴鹿は、心の中でシッコミを入れる。

議会のある日本海軍の施設に掛かる橋を渡っていると道を軽機動車が塞いでる。

「何をしている」

S P（海軍憲兵）が言う。

「いえ、タイヤがパンクしまして・・・」

そうやって少年兵が機動車を修理していた。

一瞬の出来事だった。

機動車を修理していた少年兵が隠し持っていた拳銃でS Pの頭を撃ちぬく。

護送車に乗っていた運転手、護衛のS Pを次々に射殺する。

我々の乗っていた車は、車列の最後尾だったため、最初の襲撃をやり過ごした。

襲撃してきた少年兵は、細茅中将を車から引きずり降ろし護送車を開けると脅している。

護送車の扉が開く。

少女が出てきた。

「ね、姉さん」

少女は、安堵して言う。

「あんな簡単な任務で、トチツてんじゃねえよ！」

被っていた帽子が脱げた頭から黒い髪をなびかせてピンタをする。

「ご・・・ごめん・・・さい」

少女は、目に涙を浮かべて言う。

すると襲撃犯は、少女を抱き締めた。

「大丈夫か？ひどい事されなかったか？」

襲撃犯は、言う。

あの襲撃犯は、どうやら少女の姉のようだ瓜二つの顔をしている。

襲撃犯は、細茅中将の腕をねじ伏せ盾にしこちらを向く。

「あ、もう少し盾にする人選んだ方がいいよ」

そお梓が言うと橋の下からパルヴァティー所属のアルフとM I G 29 Sヘリが上昇してきた。

「細茅中將は、日本海軍は、テロに屈しない自分に構わずテロリストを撃てと言ってるわ」

「そんな事言ってるねー」×3（ツッコミ）

「ミノル二佐、本当に撃つんですか!？」

後部座席に乗る杉田翔一、三尉が言う。

「もちろん、私も奴に恨みがあるんよ」

操縦席のミノル二佐が機銃のトリガーを引く。

「クソ!」

襲撃犯は、細茅中將を突き飛ばした。

アルフの37ミリ機銃弾が毎分二千発の発射速度で撃ち出され中將の頭上を飛んでいく。

二人の少女は、橋から飛び降りた。

鈴鹿達は、橋の下を覗く。

二人は、仲間と思われるボートに救助されていた。

「ミノル二佐、マルタ皇女殿下は?」

鈴鹿が言う。

「はっ、赤城一佐達の言うとうりでした」

「議会は、皇女殿下等を暗殺しようとはしましたが、ミノリ三佐率いる陸戦隊により救助され今クシナに収容しました」

ミノル二佐が報告する。

すると、横須賀港方面で黒煙が上がった。

「あれは、何!？」

鈴鹿が言う。

「横須賀鎮守府の通信を傍受、日本海軍所属の駆逐艦数隻が無差別に港湾施設を攻撃している模様!」

ミノル二佐が報告する。

「何ですって!？」

横須賀港で何が起きているのか!

続く

05 話極東の国

燃える横須賀軍港、鈴鹿達三人は、艦載ヘリでそれぞれの艦に戻り第一教導連隊は、ウィルキアに向うため横須賀港を緊急出港する。

「状況は？」

鈴鹿が尋ねる。

「はっ、突如、日本海軍所属の駆逐艦四隻が港湾施設に攻撃を開始した模様」

シナノ一尉が報告する。

「艦長、前方に日本海軍の艦隊が展開中……あの水上迷彩……横須賀教導隊です！」

伊吹が言う。

「赤城艦長、この騒ぎも罷かもしれませんね」

摩耶がホログラムに映る。

「確かに、私達のマルタ皇女殿下救出も他から見たら逆に私達が拉致した様に見えるしね」

梓がホログラムに映る。

「各大隊、第一種戦闘配置発令、相手が撃ってくるまで攻撃は、厳禁する」

鈴鹿が連隊長命令を出す。

「艦長、横須賀教導隊旗艦、戦艦水戸より発行信号、（S A宛、貴艦隊は、旅団本体に合流しウィルキアに退避せよ反乱艦艇は、我々が押さえる。KS）以上です」

見張り員が言う。

「SK?……薩摩京太郎中将！」

鈴鹿が言う。

薩摩京太郎中将、横須賀教導隊の艦隊司令で今の日本海軍を改革しようとする人格者で鈴鹿達の士官学校の教官で鈴鹿の父、赤城四郎の親友でもある。

「全艦、最大戦速で東京湾を突破、沖合に待機している南太平洋方面隊（旅団）と合流、ウイルクアに針路をとる」

鈴鹿が言う。

「艦長、水上レーダーに強いノイズが小笠原方面に！」

伊吹が言う。

クシナが言う。

「第七艦隊が襲われた時に感じた気を感じる」...

「いえ、それ以上の...頭が痛くなるわ」

「我々を攻撃するつもりかしら？」

鈴鹿が尋ねる。

「いえ、我々を攻撃するために来たのでない様です」

クシナが答える。「そう...今の我々には、攻勢に出る余力はないわ」

「真つすぐウイルクアに向いましょう」

鈴鹿が言う。

翌日、南太平洋方面隊本体と合流した第一教導連隊一行は、ウイルクア立憲王国、シュヴァンブルグ港に寄港した。

上陸後、マルタ皇女以下、海軍親衛隊、我々南太平洋方面隊各連隊長、ウイルクア立憲王国首脳による会談が行われた。

「我々の受け入れて下さったことに感謝します」

「トライトン首相」

マルタが言う。

「いえ、我が国もかつて同じことがありましたので」

トライトン首相がいう。

「まさか伯父...いえ、アル国王がクーデターを起こし封印されていた超兵器を再起動させるなんて...」

マルタが言う。

「マルタ殿下そのことですが...」

「サイド国王は、クーデターを事前にわかっておられました」

「そして、クーデターは、アル国王の意志でないことも」

「このクーデターにある闇組織が関わっていることがわかりました」
鈴鹿が言う。

「海の民の事ですか、赤城連隊長？」

トライトン首相が言う。

「御存じでしたか」鈴鹿が言う。

「ええ、我々は、大戦終結後、ヴァイセルガーに超兵器機関と超兵器艦船技術を提供したある組織を調査していました」

「それが・・・海の民ですか？」

マルタが尋ねる。

「その、海の民は、古来から戦争の裏で暗躍し、アメリカ独立戦争、日本の明治維新、欧州大戦、ロシア革命などにも関わっていることがわかりました」

トライトン首相がいう。

「トライトン首相、解放軍の出動命令を要請します」

マルタが言う。

「要請を受諾します」

ここに、第二次解放軍の出動が決まった。

続く

06 話超兵器再起動

クーデター発生から12間後の西ルイズ海軍司令部は、混乱していた。

なぜなら、このクーデターは、一カ月まえに中止になったはずだったからだ。

「陛下、第五戦隊より入電です」

従兵が電文を読み上げる。

「1410、逃走をはかった反乱部隊を捕捉」

「1413、反乱艦艇突如停船」

「1415、反乱艦艇に陸戦隊が突入、反乱艦艇艦長以下乗員全員の死亡しているのを確認とのこと」

「死因は、艦内の消火用窒素ガスが大量に散布による窒息死とのこと」

「第三勢力の動きは？」

アルが尋ねる。

「米第七艦隊がフィリピンを発し退避中の東ルイズ、OPKF、ウィルキア海軍の連合艦隊と接触」

「無線傍受したところ、第七艦隊は、国王遺族の引き渡しを要求した模様」

「マルタは、どうなった？」

アルが尋ねる。

「第七艦隊は、所属不明の艦艇の攻撃を受け撤退した模様です」

「マルタ皇女殿下は、第一教導連隊が保護、連合艦隊は、日本の横須賀に向っている模様」

「そうか、もう下がっていい」

従兵が一礼し執務室を出る。

アルは、廊下を歩き突如立ち止まる。

「この騒ぎは、全部貴様等の仕業か？」
アルが言う。

「あれね、ぼくの気配に気付いていたんだ」
後ろに中性的な少女が立っていた。

「仕業か？って」

「そもそも、クーデターは、陛下が立案なされたんじゃないですか」

「僕達は、手助けしたに過ぎない」

「最後のピースと引き替えにね」

「計画は、中止にしたはずだ！」

「ええ、キャンセルになりましたよ」

「そして、僕達は、彼の国からの依頼で、実行したにすぎない」

少女は、嘲笑う。

「なんだと!？」

このクーデター計画は、彼の国に漏れていた!？」

奴らがリークしたのか。

否、クライアトの依頼をリークするようでは、自分達の信頼性を落とすようなものだ。

「あ、そうそう」

「この国にある超兵器は、自由に活用していいと言付けられました」

「ちゃんと戦わないと娘もこの国も失うだろうね」

「まあ、陛下の性格では、血が繋がらない娘でも切り捨てられないでしょうね」

少女は、笑う。

「貴様等!」

「でわ、僕達は、これでしつれします」

少女は、廊下を右に曲がった。

「まで!」

アルは、少女を追い右に曲がった

「話は、終わって...」

少女は、消えていた。

奴は、何処からか現れ消えていくのだ。

「陛下」

女性士官が声をかける。

「なんだ」

「四軍の軍令部長官の召集が完了しました」

「わかった」

アルは、エレベーターにのる。

エレベーターの扉が開く

円卓には、四軍の長官たちが座っている。

「諸君、報告を」

「はい、米第三艦隊を真珠湾から出航を確認しました」

「ホワイトハウスは、太平洋の平和を乱す国家をテロ国家とみなし鎮圧すると……これは、実質的に宣戦布告です」

海軍司令が報告する。

「ソビエトは？」

「情報部によりますと満州並びにウィルキアの国境付近に動きがあるようです」

「アラブ駐留艦隊も北中国の軍港に回航を確認しました」

「超兵器の動きは？」

「黒海洋上に大型レーザー戦艦を確認、試験航行を行っている模様
陸軍長官が報告する。

「わかった」

「我が軍の超兵器の準備は？」

アルが尋ねる。

「再起動にあと一週間かかりそうです」

「大国に潰されぬために超兵器を使うことになる」とわ

「私もヴァイセンベルガーと同じ穴のムジナだな」

アルがため息をはく。

ついに超兵器同士の戦闘の火蓋が切られよとしていた。

続く

07 話再会

ウィルキア立憲王国 シュヴァンブルグ港

港内では、ドックで解放軍艦艇の艤装作業が行なわれていた。

「鈴鹿連隊長、武装の換装は、15時間で完了とのことですよ」

技師が報告する。

「ご苦労さま、各艦のBS機関と艦魂との同調率は？」

鈴鹿が尋ねる。

「全ての艦が50%以上ですよ」

「了解、あと念のために耐レーザー皮膜塗装のリペイントも念入り
にお願い」

「はっ」

技師が敬礼する。

鈴鹿は、潜水艦が停泊しているドックに向った。

「トライトン大佐」

鈴鹿は、男に声をかけた。

「赤城一佐！」

トライトンは、敬礼する。

「お久しぶりですね」

トライトンが言う。

「はい、あれから4年になりますね」

「あの時、大佐が離脱した後、アリナ少佐たち第十一艦隊も最良の
訓練と言つものがありましたよ」

鈴鹿が言う。

「ええ、准将から聞きました」

「旧軍の超兵器運用艦隊と戦つたと言っていました」

「今回の事も関係しているのですか？」

イザヤが尋ねる。

「いえ、彼女達は、メタルモテル直接関係していませんが全ての元凶の闇組織が

動いている事がわかりました」

鈴鹿が言う。

「他に超兵器を動かせる者がいたのですか！」

イザヤが尋ねる。

「ええ、ウィルキアに着くまでに二回メタルモデルらしい少女達の襲撃を受けました」

「ソ連海軍のメタルモデルの育成計画は、我々が頓挫させたので除外、米第七艦隊を壊滅させたので米海軍も除外となると他にメタルモデルを所有しているとしたら40年前にヴァイセンベルガーにメタルモデルの技術を提供した組織しかいませんから」

鈴鹿が言う。

「なるほど」

トライトンが言う。

放送が流れる。

「各艦隊の幕僚将校は、会議室に集まってください」

「さて、行くとしますか」

鈴鹿が言う。

会議室では、解放軍の幕僚将校たちのブリーフィングをが行われていた。

「昨日に、所属不明の大艦隊が東西ルイズの主要軍港に入港したと諜報員から報告がありました」

「おそらく、海の民の艦隊と思われます」

OPKF司令長官、赤城ヤシマ大将が説明する。

「ヤシマ大将、西ルイズから何か声明は、有りましたか？」

カイト首相が質問をする。

「いえ、今のところは、ありません」

「むしろ、アメリカとソ連が一方的に西ルイズに宣戦布告がありました」

ヤシマが言う。

「それに呼応し西ルイズ海空軍がフィリピン州のアメリカ駐留艦

隊を壊滅させました」

「この戦闘にインドシナに駐留する東ルイズ海軍とOPKFの連合艦隊が緊急出動し接触しましたが威嚇もせず遠ざかって行ったそうです」

「彼らは、我々との戦闘は、望んでいないと思われます」
ヤシマが言う。

この状況三十年前より複雑だ。
単なる世界征服を唱えるでなく闇組織が仕向けた大国からの自衛戦闘だからである。

「問題は、米ソと海の民ということになるな」
解放軍司令長官シュルツ大将が言う。

「この映像を御覧ください」
スクリーンに戦艦のラツタルから降りてくる二十代の男女が映る。

「この二人は？」
カイトが質問をする。

「ベルナー外務大臣、あなたは、この女性とは、一度お会いになられていますよね？」

ヤシマが言う。
「こ、この人は！」

「ベルナー、知っているのか？」
シュルツが問い掛ける。

「ええ、三十年前のクーデターの前にヴァイセンベルガーが自分に接触してきたときに腹違いの姉と言われて会いました」ベルナーが答える。

「馬鹿な三十年前の人間なら少なくとも五十代になっているはずだ」
シュルツが言う。

「おそらく、二十代のままなのは、彼女もメタルモデルの一人だと思われれます。学歴にウィルキア海軍大学遺伝子工学科の前に大津島分校の一期生であることがわかりました」
ヤシマが言う。

「あの男は、娘も兵器に変えていたのか！」

ベルナーは、机を叩く。

「もう一人の男は？」

首相が尋ねる。

「こちらの写真を御覧ください」

スクリーンに白黒写真が映る。

「昔のウィルキア国防軍の海軍大学の卒業写真だな十五期生のようだが」

一人の学生がズームアップされる。

「映像の男に似ているな」

「ま、まさか」

シュルツが言う。

「解析の結果、酷似率は、90%で本人間違いないそうです」

ヤシマが言う。

その時会場の空気が凍り付いた。

映っている海軍大学十五期生の男の名前は、若き頃のフリードリッヒ・ヴァイセンベルガー三十年前のクーデター首謀者、大戦を引き起こした男である。

「おそらくヴァイセンベルガーは、メタルモデルの量産のためのクローン技術を応用し己のクローンを作っていたのだと思います」

「頭には、オリジナル記憶をそのまま入っているとされます」

ヤシマが言う。

「あの男は、どこまで人の道を外れれば気が済むんだ」

会場に罵声が飛ぶ。

「ヤシマ大将、ヴァイセンベルガーは、メタルモデル量産をしようとしていたとなるとあの艦隊にも超兵器、メタルモデルが配備している可能性があるということだな」

カイトが尋ねる。

「ええ、おそらく我々が保有するメタルモデルは、相手と比べると自分も含め僅かで赤城一佐の戦闘報告を診るに相手のメタルモデル

は、かなりレベルが高いと思われます」

ヤシマが答える。

「ヤシマ大将、友軍のメタルモデルに召集を掛けていただけますか？」
「あなた方には、辛い戦いになるかもしれないませんが一緒に戦っていただけますか？」

首相が尋ねる。

「もちろんです」

「自分も姉妹達も我々を人として扱ってくださった人たちと決着が着けられますから皆呼び掛けに答えてくれると思います」

ヤシマが微笑んで答える。

太平洋洋上

「今、ヤシマからシュヴァンブルグに非常召集よ」

大和型戦艦の艦首に立つ黒髪をなびかせて少女が言う。

「西の方では何やら一騒動あったようだけどね」

金剛型戦艦の艦首に立つ少女が言う。

「この辺りの警戒は、イ-400と軽巡たちに任せて重巡以上の娘は、みんな行くわよ」

黒髪の少女が言う。

「総旗艦長、西の方角にブリックを感知、速い、直上を通過します」
同時に巨大な機体が艦隊の上を通過する。

「あのマークは、西ルーズの宇宙軍！」

メタルモデルたちが驚く。

「三十年前の時以上の嵐が起きるかもしれないわよ。ヤシマ……」

黒髪の少女が呟く。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7929k/>

ウォーシップガンナー2 蒼海の少女達

2010年10月9日00時59分発行